

臨床病態学

松浦雅人編



臨床検査学，医学は常に進歩しており，新しい知見が蓄積されている．さらに，公衆衛生の改善や，高齢化の進行による疾病構造の変化，構造改革による医療を取り巻く環境の変化，バイオテクノロジーに基づく新しい技術が実用化されるなど，臨床検査学は留まることなく変化している．このように，急速に変化し続ける環境のなかで，臨床検査技師に求められる知識，技能も拡大の一途をたどっている．

このたび上梓された松浦雅人先生の編集による『臨床病態学』は，主要な疾病について各分野の第一線の専門家によってコンパクトにまとめられた良書である．

第Ⅰ章から第Ⅴ章までは総論であり，第Ⅰ章の「医学概論」では，健康の概念，医学の歴史，医療従事者の種類，医療従事者が従うべき医療倫理について，第Ⅱ章の「臨床医学総論」では，疾病を引き起こす原因，疾病の症状，疾病の転帰，疾病分類，疾病予防，救急医療，末期医療について解説されている．

第Ⅲ章は，臨床検査学の要である「臨床検査管理学」にあてられ，臨床検査業務における基準値，精度管理，検体管理などをわかりやすく解説している．

第Ⅳ章「臨床医用工学」では，近年の電子機器の進歩・低価格化，医療機器への導入に伴って，臨床検査技師が必要とする医用工学の知識がまとめられている．院内ネットワークの概念や，センサ，感電防止対策，最新の測定技術の他，臨床工学技士が管理する生命維持管理装置についても解説されている．

第Ⅴ章の「染色体と遺伝子の異常」では，遺伝子・染色体の基礎知識から，染色体異常，遺伝子異常，これらと関連した臨床検査が解説されている．遺伝

子異常の判定は，今後臨床検査の分野に広く導入されることが予想され，これからの臨床検査学を担ってゆく人材にとって，必須の知識である．今後上梓される臨床検査学の教科書は，本書のようにこの分野について単独の章を設けることになろう．

第Ⅵ章は「臨床病態学各論」であり，世界保健機関（WHO）による国際疾病分類第 10 版（ICD-10）の分類に沿って各疾病について解説されており，第Ⅵ章だけで，本書の 3 分の 2 以上を占めている．各セクションは，そのセクションで扱う疾病のアウトラインから始まる．代表的な疾病についての解説は，「概念・病態」「診断」「治療・予後」という構成で統一されており，分担執筆でしばしばみられる不統一感を解消し，目的とする情報を探しやすいように工夫されている．筆者は大学を卒業して約 20 年になるが，本書を一読して，自身の専門以外の領域での変化には目を見張った．新たな治療が多数導入されているのみならず，疾病概念や下位分類も大きく見直された疾病があったためである．

本書は，臨床検査学を学ぶ学生，最新の知識を取り入れたい臨床検査技師だけでなく，すべての医療従事者にお勧めする一冊である．

（北里大学教授 医療衛生学部 健康科学科/北里大学東病院 精神神経科 田ヶ谷浩邦）

<B5 判/348 頁/定価 5,460 円(本体 5,200 円+税 5%) / 医歯薬出版/2009>